
私が彼と結婚した理由

彩香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が彼と結婚した理由

【Nコード】

N6176Z

【作者名】

彩香

【あらすじ】

主人公 橋田亜紀^{はしだあき}は新しいつぐみ町に引っ越ししてきた。高校は私立のつぐみ学園に入り、そこで濤沢龍^{なみさわりゅう}に会い恋に落ちる。だけど龍は亜紀に隠していることがあった。

それはある一枚の写真に龍と一緒に写ってる女の子

龍は何を隠しているのか！？

新しい友達

みなさん、こんにちは 私の名前は橋田亜紀^{はしだあき}

私はつぐみ町に引越してきてもう長い月日が続いています

私はもう32歳結婚をして子供もいます

今、思い出せばいろんなことがあったなあって思い出してしまふの

子供『お母さ〜ん』

亜紀『どうしたの？』

子供『お母さんとお父さんどうやって知り合ったの？』

亜紀『それはねお母さんとお父さんが高校生の時に知り合ったの』

子供『へ〜お母さんとお父さんどうやって付き合って結婚したか教えて』

亜紀『え〜』

子供『教えて、教えて』

亜紀『しょうがないな』

亜紀『お母さんは中学卒業してからつぐみ町に引越してきたの
高校は私立のつぐみ学園に入学するの』

そうそうこんな感じだったなあ

亜紀『はあ〜・・・今日から学校かあ・・・』

亜紀『友達できるかな』

私は重い足どりで学校に向かった

やっとの思いで学校についた

亜紀『うわ〜緊張してきた』

先生『新1年生はこちらでクラス表を見て自分の教室に行ってください』

亜紀『クラスか・・・私、何組かなあ!？』

亜紀『別に中学校の時の友達はいないから何組でもいいけど・・・』
そして、クラス表の前に立って自分の名前を探す。

亜紀『えーと、高橋、高橋・・・』

亜紀「ん!？」

私は自分の名前を探す途中、目に入った名前があった。

亜紀「何て読むのかな・・・男子の名前みたいだけど・・・

沢・・・龍!？」

亜紀「うーん・・・沢の前って何て読むの・・・かな!？」

亜紀「あっ! いけない、いけない、自分の名前探さないと!」

亜紀「・・・あった、なんだ私もB組か!？」

亜紀（変わった名前の子と一緒にゃん）

亜紀『それでね、そのころのお母さんはまさか変わった名前の男の子に恋をするなんて思ってもいなかったの』

子供「それがお父さん?」

亜紀『そうだよ』

私は自分の教室に向かった

亜紀（あー、さっきの名前で緊張なくなったと思ったのに、また、緊張してきた）

??「ねえー、もしもーし」

亜紀「はあ〜」

??「ねえーてばっ!!!」

亜紀「・・・えっ!？あ、ごめんなさい。なにか用ですか?」

??「何か用ですかじゃないよー」

??「人がせつかく友達になろと思って話しかけてんのに、元気ないつすなー・・・それもそっか、なれない環境だもんね〜何!？
中学ん時の友達とかいないの!？」

亜紀「え・・・うん。私、今年引越してきたから・・・」

??「へえー、あっ!!!まだ自己紹介してなかったねっ!」

??「私は秋田 こまち（あきた こまち）って言うのよろしく!
!」

亜紀（どっかで聞いたことある名前だなあ）

亜紀「えっと私は橋田 亜紀って言うのよろしく。」

こまち「ok!じゃあこれから亜紀って言うね」

こまち「私のことこまちって言って!!」

亜紀「う、うん わかった。」

こまち「私の席は亜紀の前だからね!!いつでも、話しかけてくれていいから」

亜紀『すごく変わった名前でしょ!?!お米の名前だからびっくりしちゃったけどすごく優しくて頭がよくて今は有名な会社で働いてるの』

子供『でも、お米の名前はないよ』

先生「ほらあ、お前ら席につけっ!!体育館に行く前に出席とるぞ」
亜紀（始業式なんだから、みんな来てるじゃん・・・。）っと思っ
ていると

先生「濤沢!!濤沢龍!!いないのかあ!ふうー、昨日の入学式には来てたのに、もう欠席かあ・・・まったく!!」

亜紀（濤沢!?!うゝんどつかで聞いたことあるような・・・ないような・・・濤沢・・・龍・・・。）

亜紀「あっ!!思い出した。変な名前の人だあ」

亜紀「へえゝなみって読むんだ・・・。」

1人でボソボソ言っていると、

こまち「ねえー亜紀!濤沢と知り合いなの!?!」

亜紀「えっ!!ち、ちがうよ!変わった名前の人だなあーって思っただけ」

こまち「ふーん」

先生「よし、みんな時間になったから体育館行くぞ」

亜紀『そのころは何も思わなかったけどそのころからお母さん、お父さんのこと好きだったのかもしれないね』

子供『早く続き教えて』

亜紀『はい、はい それで』

亜紀「やつと終わった」

こまち「亜紀ゝ学校終わったからさ、どっか遊びにいかない?」
亜紀「いいよゝどこに行く」

こまち「うん」

亜紀「初めて友達になったからゲーセンでプリクラとらない？」

こまち「いいね　じゃあ行こう」

亜紀「でも、こっち来たばかりだからどこにゲーセンあるかわからない・・・。」

こまち「大丈夫　教えてあげる」

亜紀「ありがとう」

私はこまちに連れられてゲーセンに行った

亜紀「大きいゲーセンだね」

こまち「そうでしょ　プリクラだけで何台もあるんだから」

亜紀「へーそうなんだ」

こまち「早く撮りに行こう」

亜紀「う、うん　ちよつと待ってよ」

私はこまちと何枚もプリクラを撮った。

こまち「たのしかったね」

亜紀「うん」

こまち「あ、あれ取りたかったんだ」

亜紀「かわいい　ぬいぐるみ」

私とこまちは、かわいいぬいぐるみの前に立って100円を入れて何度もやった

こまち「なかなか取れないね」

亜紀「う、うん」

こまち「亜紀やってみてよ」

亜紀「わ、分かった　取れるかどうかわかんないよ」

私がやるうとしたとき知らない男の子が
??「ちよつとかしてみ」

亜紀「えっ？」

その男の子は黙々と100円を入れて黙々とぬいぐるみを取った

亜紀「す、すごい」

こまち「何回やっても取れなかったのに・・・」

男の子が去ろうとしたので

亜紀「あ、あの名前聞かせ下さい」

男の子は黙ってどこかに行ってしまった

こまち「すごかったね」

亜紀「う、うん」

こまち「そろそろ帰ろう」

亜紀「うん また、明日学校でね」

こまち「うん バイバイ」

私は家に帰った

―高橋家―

亜紀「ただいま」

つと言つて靴を脱いで部屋に入った

お母さん「おかえりなさい」

お母さん「おそかったのね」

亜紀「友達と遊んでたの」

お母さん「もう、友達できたの？ちょっと安心したわ」

お父さん「おかえり」

亜紀「ただいま」

お父さん「高校はどうだった？」

亜紀「楽しかったよ」

亜紀「今日ね友達と一緒にプリクラ撮ったんだ」

お母さん「そうなの よかったわね」

お母さん「お名前は？」

亜紀「秋田こまちって言うの」

お母さん「秋田・・・こまち？」

亜紀「どうかしたの」

お母さん「あははは秋田こまちってのははは」

亜紀「お母さんどうかしたの？」

お母さん「秋田こまちってお米のなまえじゃない」

亜紀「え？」

お父さん「え？」

亜紀「ほんとだ」

家族は爆笑に包まれた

（翌朝）

私は気持ちよく目が覚めた

支度をしてごはんを食べて学校へ行った

（教室）

こまち「おはよう」

亜紀「おはよう」

こまち「昨日は楽しかったね」

亜紀「うん」

チャイムが鳴り響く

先生「席につけ」

先生「出席とるぞ」

先生「おう！今日は来てるじゃないか！？濤沢」

亜紀（濤沢ってどんな子だろ？）

私は濤沢のほうを見たとき

亜紀「あ～～！！」

こまち「あ～～！！」

私とこまちが一緒に声を出していた

先生「お前ら二人どうしたんだ？」

亜紀「な、な、何でもありません」

こまち「す、す、すみません」

こそこそ話で

こまち「ねえ亜紀 あの男に子って昨日の子だよね」

亜紀「う、うん 見間違いないでしょ」

こまち「だ、だよね」

先生「授業はじめんぞ」

（50分後）

亜紀「やっと終わった」

こまち「やっとだね」

こまち「濤沢ってさ以外にかっこいいよね」

亜紀「そうかな」

濤沢のほうを見ると女の子に囲まれていた

女の子集団「濤沢く〜ん濤沢く〜ん」

子供『昔からお父さんはモテモテだったんだね』

亜紀『そうだよ』

男の子集団「濤沢　すごいよな　女にもててもじゃん」

こまち「あれはすごいね。亜紀」

亜紀「う、うん」

〜放課後〜

こまち「やっと終わったね」

亜紀「うん。疲れた」

こまち「今日はどうする？」

亜紀「今日はそのまま帰ろうかな」

こまち「わかった　また明日学校でね」

亜紀「うん、バイバイ」

私は自転車に帰っていると

自転車に足が絡まってこけてしまった

子供『そのからお母さんどんくさかったんだね』

亜紀『う、うるさいな』

私はあわてて立ち上がって自転車を持ち上げようとしたときに

自転車を持ち上げてくれた人がいてお礼を言おうと思って顔みたら

濤沢だった

亜紀「あ、濤沢君　あ、ありがとう」

濤沢「大丈夫か!？」

亜紀「大丈夫　ありがとう」

亜紀「それと昨日はありがとう」

濤沢「昨日？」

亜紀「ぬ、ぬいぐるみ」

濤沢「あゝあ どういたしまして」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6176z/>

私が彼と結婚した理由

2011年12月20日19時52分発行